

●二人で味わう古典和歌(93)

わが里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくは後のち

天武天皇

『万葉集』巻二「相聞」の一首。

「天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首」とある。夫人和えて、

わが岡の霏おかみに言ひて降らしめし雪の碎けしそこに散り

けむ

藤原夫人

相聞つてこれだね、と言いたくなる天武天皇と藤原夫人

の贈答歌。「夫人」は、后・妃につぐ天皇の妻妾。藤原夫人は鎌足の娘、大原大刀自とも呼ばれた五百重娘いおえのむらづめである。

「わが里には大雪が降ったぞー。おまえさんのいる大原

の古ぼけた里に降るのはずっと後あとだろうよ」

「あー何をおっしゃってるの。わが岡の水神に言いつ

けて降らせた雪のかけらが、そっちに碎け散ったんでしょ

うよ」

このとき夫人は里下がりをしていたらしい。といっても、

「わが里」こと飛鳥浄御原あすかまみはらの里と大原の里とは、直線距離



にして数百メートルの近さ。つまり、たまたま近所の実家

に帰っていた妻に、すごい大雪だからこっちで一緒に眺め

ようよ、というぐらゐの気持ちで贈った歌なのだろう。

たぶんこの夫婦は、ふだんから漫才のようなじり合い

のやりとりをしていて、このときも、「やっつたろー」「なに

よ」のノリノリ気分で歌の贈答をしたにちがいない。つま

り、いちやいちやしているのだ。

天皇の歌には、「大雪」「大原」また、「降りり」「古りに

し」「降らまく」の同音の連続によるリズムに、楽しくて

仕方ない心弾みのドヤ顔が見える。

一方、夫人の歌には、「そっちは里、こっちはそこを見

下ろす岡よ」から、同音の「霏」(雨や水を司る神)を持

ち出す上から目線の機知に富んだ切り返しに、してやった

りのドヤ顔(こっちも)が見える。

この返歌を見て、天皇は大満足だったにちがいない。

注釈書によれば、『日本書紀』に記されている天武六

(六七七)年十二月一日の大雪ではないかとのこと。雪は、

豊作の予兆であった。

(小島ゆかり)